

# 日本地名研究所通信



第104号

二〇二三年

七月二〇日発行

〒213-0001 神奈川県川崎市高津区溝口二―六―一〇 川崎市生活文化会館4F

E-mail : [chimeiken@chimei.people.co.jp](mailto:chimeiken@chimei.people.co.jp) <http://chimei.people.co.jp/>

☎〇四四―八二二―二〇六 FAX〇四四―八二二―二一九一

## 地名曼荼羅の京都で

日本地名研究所 所長 金田久璋

労を多としたい。特に佛敎大学の八木透敎授には何から何までお世話になったし、京都地名研究会の多大なご協力にお礼を申し上げる。

京都は南方熊楠風に言うなら、歴史や自然、文化の「萃点」としてシンボリックな「地名曼荼羅」の集積地と言っても過言ではない。その古都の地で柳田の地名研究の継承を問うという、満を持してという物言いは、長年の当方の単なる思い込みかもしれない。とはいえ、風薫る五月二〇日、二二日の両日、古都の佛敎大学と日本の鬼の交流博物館（福知山市）で開催された、全国地名研究者大会は大変盛況裡に終えることが出来、共催していただいた京都市民俗学会や京都地名研究会、後援の京都市、川崎市、佛敎大学、世界鬼学会にあらためて謝意を表したい。また、いつもながら開催に向けて日々鋭意ご尽力をいただいている、各地の地名研究会、理事、評議員、事務局スタッフ一同にも感謝しかない。煩瑣な三者合同の大会のためなおさら

とりわけ、大会テーマの「地名研究の原点を京都で探る」にそつての、格調高い小田富英氏の基調講演や、篠原徹氏、小松和彦氏の記念講演をはじめ、多彩な地名研究の発表は、今後の研究活動の試金石となるものと思われた。小松和彦氏の「妖怪と地名」は妖怪研究において地名研究の嚆矢となるもの。また、篠原徹氏を始め伊藤廣之、増崎勝敏氏の海上地名の研究はこれまであまり論及されてこなかった分野である。難読地名の「先斗町」(杉本重雄)や「一口」(小寺慶昭)、地名と苗字の関連性(多仁照廣、清新な若手学究の遠野論(森内こゆき)などの画期的な地名のリアリティを再認識させられた。さて、前日の午後に行われた理事会・評議員会の席上で出された質疑やご意見、要望については、対応策について近々事務局で協議することとしている。とはいえ、今後の研究所の維



基調講演をする小田富英氏

持や研究体制、継承面を含めてあまりに課題は多い。鋭意ある皆様からの率直なご意見、ご提言をお待ちしている。

次年度以降の全国大会の候補地については、いくつか予定があがっているが、あまり難しくとらえずに気楽にご相談いただき、申し込みをいただきたい。講演・講座の講師派遣も柔軟に対応できるように考慮している。

年刊の紀要とも言うべき『地名と風土』への辛辣なご意見もいただいた。まずは率直なご提言に感謝したい。あまりに重厚で高踏的、かつ学術的、専門的過ぎはしないかとの質疑も交わ



大会趣旨説明をする金田久璋所長

されたが、かといって、大衆迎合的に週刊誌のような読み物にするわけにもいかない。初代の谷川健一所長が開拓された「野の学問」としての地名専門の研究誌としての第一義としての使命もある。ボランティア活動で編集作業に邁進されているスタッフのご尽力の賜物でもある、伝統ある『地名と風土』誌が、全国の地名研究会の交流誌としての位置づけを今後どうあるべきか対応策を検討したい。

## 京都大会に参加して

名古屋市在住会員 塩瀬博子

地名研究者大会へ四回目の参加。朝から身が引き締まる。

菊地実行委員長の開会挨拶の後、金田所長の大会趣旨説明で、「日本民俗学会において地名が主題とされた研究はほとんどない。地名研究がなおざりになってきている」というご発言があった。私もその会員の端くれとなつて約一〇年、そう言えばなかつたと振り返る。地名には土地のみならずそこに在る山谷や川、湖沼、漁場などの地理的名称、加えて神社等の人為的な事物も含まれるのでは、と考えている。貴重な講演・研究報告を拝聴し、地名

には深堀り（小松和彦氏）や展開のできる奥深さがあるのだと改めて気付いた意義深い一日だった。

翌日のエクスカーション。子供の頃絵本で見た『大江山の鬼退治』の地にある「日本の鬼の交流博物館」へとバスは向かう。館内の鬼の出自についてのキャプションで、鬼伝説の背後に鉾山が潜む（鬼＝鉾山技術者集団＝タタラ師）という説明があり、この説が一番腑に落ちた。その風貌と水の汚染が恐怖の対象となるのはあり得ることだと思ふ。

地名への関心が大きくなったのは平成の市町村合併時二〇〇五年のこと。私の故郷は福井県で、二〇二二年の大会地・一乗谷から南西に約一五キロメートルの武生市。国府のあった地で八〇九世紀の古代歌謡『催馬楽』にも「太介不乃己不」と歌われ、表記は歴史上違いがあったが長年「たけふ」と呼び習わされてきた。その慣れ親しんだ地名がある日「越前市」になったと知り、唾然とした。県外者の意見は皆「何で歴史がある市名を変えた？」との疑問形で、怒りも覚えつつ最後は「寂しい」「残念」という反応だった。人々と共に生きてきた郷里の地名は消え去ってしまった（研究所通信一〇三号にも記述有）。

谷川健一氏は「地名の改竄は歴史の改竄につながる。それは地名を通じて長年培われた日本人の共同感情の抹殺であり、(後略)」「(日本の地名)」と述べられている。歴史を伴う名を残す事はできなかつたのか、と地名の重みを強く感じるようになった。

そんな時二〇一八年金田久璋氏から「出雲大会」の案内書を読み初めて参加し、翌年の「遠野大会」へと続いた。後コロナ禍で参加を見合わせ、昨年郷里での「一乗谷大会」で久しぶりに参加。毎回、全国大会のプログラムでは研究拜聴とエクスカーションという二つの組み合わせに充実感を覚え、また一般者受け容れ・一日参加可という点でもオープンな柔軟性を感じる。

今回京都大会で新会員になった。それは人との不思議な縁がきっかけだった。一乗谷大会時、バスで隣に座られた方が偶然同じ武生のご出身。しかも中学、高校の先輩ということが分かり驚いた。その方のお陰でさらに知り合いの輪の広がったことが入会を後押ししてくれたと思う。

初日に知的好奇心を動かされ、翌日に実地の旅。毎回お世話を戴く地名研究所の皆様にご感謝しつつ、今後地名を勉強させて頂きたいと存じます。

## 地名研究の原点を探る

熊本地名研究会 藤野芳太郎

地名にこだわり続けた柳田国男

基調講演を行ったには日本地名研究所の「地名と風土」編集長の小田富英氏で、「日本文化の一隅に地名の柱を―柳田国男の地名研究の『揺らぎ』に学ぶ」の題で話した。小田氏は、開会あいさつで金田久璋所長が「最近、日本民俗学会で地名に対する研究発表がない。また、全国の地名研究者の間でも民俗事象を地

名と関連付けて論証する傾向が見られない」と、地名研究への機運が薄れている現状を憂える発言を行ったことを受けて、柳田国男が曲折はありながらも地名研究の必要性を生涯にわたって感じていたことを、柳田の発言記録を引用して紹介した。

小田氏によれば柳田の地名へのかかわりは三期に分けられるという。第一期は明治から大正にかけてで、一つ一つの地名の考察において、素朴な疑問から生じたものと、「山人」論との関連から追求したものとがあり、特にアイヌ語地名への関心は「山人」先人民の末裔を主張する初期の柳田民俗学に通じるものがあるとする。第二期は戦前までの昭和時代。柳田民俗学の確立期とされる。中央公論に発表した「鹿の耳」の中で「地名は有力なる国民の記録」と述べているにもかかわらず『郷土生活の研究法』の中の「民俗資料も分類 第二部言語芸術」で地名に触れる部分が少ないという「揺らぎ」が見える。第三期は戦後、死去まで、自分の学問の継承に危機を感じていた柳田の発言の中に地名が数多く出て来る。ここに地名研究を続ける必要性を強く感じる。この流れは、都丸九十九や千葉徳爾、谷川健一などに引き継がれるが、大きな流れにはなり得ていない。今こそ小字より



記念講演「鵜飼と地名」 篠原徹氏

も小さい通称地名の調査・研究をやるべき時  
で、そうでないと永遠に消えてしまう、と訴  
えた。

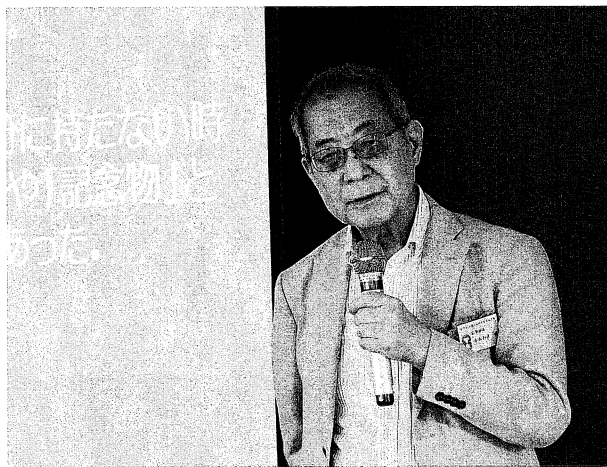
### 鵜飼に由来の地名、全国に

続いている記念講演Ⅰは、滋賀県立琵琶湖  
博物館名誉館長・篠原徹氏の「鵜飼と地名―  
フォークナビゲーションと地名が語る歴史表  
現」。一般的に漁場を特定する方法として「山  
あて」がある。例えば、まず山の頂上と手前  
の岬の先端を結んで直線を引く。次に角度を  
変えて、二つの山の稜線が交わる点と手前の  
大きな岩結んだ直線を引く。この二本の直線  
の交わった地点は動かしようがなく、こうし  
て海上であっても両氏は漁場を特定できる。  
川で鵜飼を行う鵜匠（川漁師）も、海の漁師  
が行う「山あて」と同じような「ツブアテ」  
という方法で漁場を特定する。川は地形によっ  
てセ・フチ・トロがあるが、漁師はこうした  
場所に「〇〇セ」や「〇〇フチ」と言った地  
名を付けて行く。私が話を聞いた広島県三次  
市の江の川の鵜匠は漁場に無数の地名を付け  
ていた。ここで言う鵜飼は、現在ある観光鵜  
飼ではなく、数羽の鵜を放し飼いにし鵜匠は  
歩いていく「徒歩（かち）鵜飼」を指す。こ  
れは昔、日本列島で広く行われていた川の漁  
法だ。これによって、現在でも「鵜飼」や「鵜

川」などの地名が全国に散在している。鵜飼  
の起源は稲作文化に伴って大陸から伝播し  
た文化だと考えている。

### 地名は（民衆の記憶装置）

記念講演Ⅱは国際日本文化研究センター名  
誉教授・小松和彦氏の「妖怪と地名―大蛇伝  
説を中心に」。このテーマでまず思い浮かべた  
のは「累（かさね）ヶ淵」伝説。ここは茨城  
県常総市羽生町の鬼怒川岸の地名である。こ  
こを舞台にした累（るい）という女性の怨霊  
と除霊をめぐる物語で、江戸時代に広く流布  
、浄瑠璃や歌舞伎にもなった。これによって、



記念講演「妖怪と地名」 小松和彦氏

特に地名もなかった鬼怒川のこの場所が累伝  
説の舞台として「累ヶ淵」と呼ばれるように  
なった。この地名がついたことで、由来が語  
る話が想像され、それを記念する碑や塚、遺  
品などがつくられていく。つまり地名は伝承  
や記念物と結びついた「民衆の記憶装置」で  
もある。

同じことが記紀神話や風土記にある地名起  
源説話からも確認できる。例えば、奈良県の  
葛城という地名は、神武軍が土蜘蛛を葛で編  
んだ綱で捕らえ退治したことに因んで名づけ  
られた。この神話は後に幻想化（妖怪化）され、  
能の「土蜘蛛」という演目となって民衆の記  
憶に残っていく。

（熊本地名研究会のニュースレター「熊本乃地  
名」第二六〇号から、熊本地名研究会の許可  
を得て転載するものです。）